

# 文化財を訪ねる かみのかわ山さな旅

## 日光道中 歩く(多功・鞘堂)

日光は古くから聖地として栄えましたが、江戸幕府を開いた徳川家康の霊を祀るために、元和3(1617)年、日光東照宮が建立されると、江戸から日光へと至る道は、基幹道路として整備され、江戸幕府が定める五街道の一つの「日光道中」として宿駅などが整備され、人々や物の往来が盛んに行われました。

日光道中は、現在上三川町の西側を南北に縦貫する、国道4号線とほぼ同じ場所を通っていました。上三川町には宿場などは置かれていませんでしたが、幕府の道中奉行が1800から1806年にかけて完成させた日光道中分間延絵図には、当時の上三川町の名所の様子も描かれています。今月は、石橋駅から雀宮駅まで歩いてみましょう。

石橋駅の西側に石橋宿が広がっていました。国道4号線から多功十字路に至る本町交差点付近が、石橋宿の南限でした。この石橋宿の本陣と脇本陣を務めた家の祖先は、多功城主多功家の家臣でした。先にあげた分間延絵図には廃城となった多功城の様子が描かれており、この地域にはなくてはならないシンボルだったことがうかがい知れます。事実、旧石橋町にある児山城は、初代多功城主多功宗朝の子どもが分家して城

主となった城であり、この地域の鎌倉時代から戦国時代にかけては、まさに多功家とともに歩んだ時代でした。

石橋宿を後にし、下古山交差点を過ぎると、やがて右手に鞘堂の地蔵堂が現れます。1380年に宇都宮氏と小山氏が戦った裳原の戦いの戦死者を埋葬し、その供養のため建てられたと伝えられています。更に北に進むと、北関東自動車道の高架橋が見えますが、このあたりが、日光東街道(関宿通多功道)の分岐点である追分(わかさき)となりますが、近年の開発により多くの旅人が往来した当時の様子をうかがうことはできません。

日光道中は、私たちにとって身近な街道の一つです。普段は自動車でしか通ることのないこの道を、むかしの旅人のように歩いてみませんか？きっと新しい発見があるはずですよ。



600年前の激しい戦いを今に伝える鞘堂の地蔵堂

## た報短歌

すれちがふ電動椅子の老婦人  
暑き舗道に笑みこぼしつ

六地藏の赤き前たれ揺らし吹く  
九月の朝風さわやかにりき

南の島にさらばう骨頭ちぬ  
道に乾反りしみみず拾ふも

手花火の燃え差し残る里庭に  
姉妹の浴衣秋陽に乾く

こほろぎの澄む夜の静けさに  
裏戸を押して風の入りくる

深緑の水榭こ櫓従えて  
朝日に映ゆる白樺の幹

弧の影を湯の湖に映し釣人の  
当り待ちする舟上の秋

夕映えの余白の空を魚師達の  
嘆きを外に川鴉去りゆく

輪の数の三つ四つ光る投げ石の  
リズムに心和む一刻

武藤 ひさ

斎藤アツ子

稲葉 敬子

高田 幸子

菊地 美代